



行政と市民の関係を創造する
NPO 法人 きょうと介護保険にかかわる会

会報
100 号
2018/6/8

発行人 梶 宏 〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町 3-20 賀陽コーポラス 809
TEL・FAX:075-821-0688 E-mail:npokakawarukai@helen.ocn.ne.jp

きょうと介護保険にかかわる会会報のあゆみ

～100 号発行にあたって～

理事長 梶 宏



きょうと介護保険にかかわる会をつくらうとしはじめたのが 1999 年 9 月のこと。会報を発行しはじめたのは、法人化してからのことですが、不定期刊でした。とはいえ、担当した原理事がコンピューターを駆使され、ときには 20 ページで発行されたりしていました。同じ頃に発足された「マイケアプラン研究会」（当時私も世話人に加えていただいた）が会員限定ながら月例会をもち、会報も月刊で発行されているのを見て感心したものです。

年間 6 回の定期刊にもっていったのは 2009 年度から、広報委員会を設けその責任者として藤川理事が担当されてからです。藤川理事退任後、竹山理事が引き継ぎました。

年 10 回行うようになった研修会の案内と報告を、きっちりと会報でお知らせすることで会員の皆さんとの絆を強めることに寄与したと思っています。

かかわる会よりずっと早く発足されており、最近ネットワークで関わりを持つようになった「高齢社会をよくする女性の会・京都」の会報は年に 4 回の季刊でしたが、その内容は大変充実しており羨ましく思ったものです。

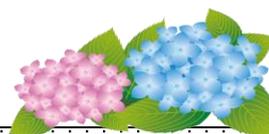
また現在の「認知症の人と家族の会」京都支部の会報は、本部報と合わせて月刊で発行されています。最初は手書きの原稿をコピーした、いかにも手作り感のあるものでした。この 5 月現在 423 号を数えております。

若い頃私が労働組合で 350 名ほどの組合員を擁する支部の書記長の任にあたったとき、学生時代に週刊の新聞編集に携わった経験もあり好きだったのと元気があったせいで、機関誌の担当も兼任し、不定期刊ながら、友達にガリ版で書いてもらって発行したものです。労組機関誌というにはかけ離れたものをつくって、皆さん呆れておられたようですが、自分では得意になっていたものです。自己満足ではあっても、機関誌なり会報なりを会員に渡すことは、団体の存在を示すため大切なことだと思っています。

これからは、紙による媒体から IT による媒体が主流になっていくのでしょうし、私自身も自筆の手紙を書くことはほとんどなくなりメールで済ませるようになっていきます。でも、紙媒体はなくならないと思います。

とくにしっかりとした団体の会報や機関誌は、その大きな役割を失わないと確信しています。現在の私はあまり役に立たない存在ですが、広報委員の末席に加えていただき、充実した時間をもつことができていることに感謝の念をもちます。





人材の育成、財政基盤の改善、広報活動の充実を目指して 新年度活動スタート！

平成 30 年度通常総会は、この時季としてはちょっと肌寒い 5 月 19 日（土）午後 1 時 30 分定刻に田村理事の進行で開始された。昨年に続いて稲葉晃治会員が議長に選出され、会員 80 名のうち出席 31 名、委任状提出 31 名の計 62 名で、総会の成立が報告された。

◇冒頭、法改正に伴う、第 1 号議案・定款第 55 条（公告の方法）の変更が提案され採決の結果全員の賛成で議決された。

◇続いて第 2 号議案・平成 29 年度事業報告、第 3 号議案・同活動計算書と監査報告が一括提案された。この中では会活動の 3 つの柱である「研修会、第三者評価、広報活動」について報告。研修会は計画通り 10 回開催したこと。第三者



評価では府下全体の受診件数が減少したと推測される中で、当会もその影響を受けたと思われることや、更にその背景としては、介護サービス事業者を取巻く人手不足や経営環境の厳しさなど、各種要因が複合的に影響したと思われることが報告された。広報活動の中では会報の 6 ページ化と配布部数 400 部への増刷と共に、新ホームページの試作進捗状況が報告された。活動計算書の説明では昨年度も 307 千円の赤字決算を余儀なくされ、次期繰越財産額が 1506 千円に減少したことが報告された。監査報告が終わったところで質問等を確認、「よりよい介護をつくる市民ネットワ

ーク」との連携強化とシンポジウム継続開催等に対する質問に対し、研修担当の中川副理事長より詳しく説明され、採決の結果大きな拍手で一括承認された。

◇引続き第 4 号議案・平成 30 年度事業計画案と第 5 号議案・活動計算書（予算案）が提案された。研修会では参加人員増に向け更なる工夫を行うこと。第三者評価では事業収入の大半を占め会の活動を財政面から支えている実態を踏まえ、受診件数を 20 件目標とする積極予算を組んだこと。それでも尚赤字予算になること等が説明された。広報では会報紙面 6 ページ化を生かした企画の充実と、新ホームページへの切り替えは 9 月を目途に鋭意進行中であること等の提案があり、何れの議案も大きな拍手で承認され、予定通り 2 時 30 分に終了した。

◇この後、外国人留学生を対象とした介護福祉士養成学校・篠山学園の飯森裕行学園長による記念講演「期待される介護留学生」があり、講演のみの一般参加者も含めて高い関心が示された。介護職員の不足は深刻な問題であり、政府も今年度法改正を行って在留資格の緩和策や奨学金の返済免除などを検討していますが、これを積極的に前取りした学園として注目されています。5 時から場所を変えて恒例の懇親会を開催、大いに盛り上がり、会員の交流と親睦を図りました。

（小栗 大直 記）

総会記念 講演報告

期待される介護留学生

- 日時：5月19日（金）14：45～16：30
- 会場：ひと・まち交流館京都 3階第5会議室
- 講師：飯森裕行氏 社会福祉法人ウエルライフ
介護福祉士養成校 篠山学園 学園長
- 参加者：34名



講師は、まずご自身の30有余年の職歴から介護とのかかわりを語りだされた。約8年間の会社員生活を経て、介護福祉の世界に転職。5年間、現場で貴重な経験。その後いくつかの施設を経て、介護者養成の専門学校の教員に。現職は3年前から。若い留学生への教育に温かく精力的に取り組まれている様子が伺えた。

《介護職員の不足の現状》

介護保険制度発足時の介護職は55万人、それが2012年153万人、2025年には約250万人の需要が見込まれ30～50万人の担い手不足が予測される。現在でも、事業所の63%が人材不足である。意義のある仕事ではあるが、一般にネガティブな印象が強く募集しても人が集まらない。

《外国人による介護支援策》

①2008年度からEPA(経済連携協定)に基づきインドネシア、フィリピン、ベトナムから看護師、介護福祉士候補者(滞在期間は各3、4年)の受け入れが始まる。労働力不足への対応ではなく、経済活動活性化が目的。しかし資格試験に不合格なら原則帰国などハードルは高い。

②技能実習制度・開発途上国の外国人を一定期間受け入れ、技能(繊維・衣服、機械、食品等)をOJT等で技能移転するのが目的、日本で学び母国で広める。最長5年。1993年創設。在留者2017年25万人。昨年「介護」が追加された。

③留学生・・・入管法の改正(2017年9月)で在留資格に「介護」が設けられ、「留学生」が国指定の養成校で2年以上学び国家試験に合格すると卒業後に「介護」の資格に切り替えられ日本で仕事に就くことができる。(但し、2012年度卒までは、卒業と同時に介護福祉士取得の特例がある)介護福祉士養成校への留学生の入学者は2012年18人、・・・2016年257人、2017年591人、2018年4月約1500人が入学した。国別ではベトナム364人、中国74人、ネパール40人他。なお、介護福祉士養成校は全国で約300校、定員約7000人。受験者が減少し定員割れが半数の状況である。

《社会福祉法人が「篠山学園」を開設し自前で人材養成に取り組む》

①開校・・・2017年9月、西宮市で特養を運営する理事長木曾賢三氏の発想で、篠山市の県立高校の廃校地を活用して1学年定員80人「各種学校、100%外国人」の許可条件のもとに開校。週3日は授業、他の3日は介護施設限定のアルバイトをしながら学内の寮で共同生活(2年制)。現在は女性のみ。開校以前に何度もベトナムを訪れ準備をした。彼女たちは日本語をある程度現地で習得している。留学理由は日本への憧れが一番で、収入の魅力もある。ベトナムは高齢化率も低いいため介護需要は少ない。日本での就労を望んでいる。

②入学者は当面はベトナム人中心、今後ネパール、タイなど東南アジアも。

③日本語や日本の文化、食生活など真面目に学んでいる。みっちり教育する必要がある。

④奨学金や生活費も支援している。

⑤留学生の確保、国試対策や就職いろいろと課題はある。彼女たちは明るく笑顔がよくてアルバイト先でも評判がよい。最初クサイ、キタナイといっていたことにも慣れ、楽しく周囲と信頼関係を築く中で成長する姿を見た。地域も大歓迎で交流もあり不安感はない。介護福祉士として一生懸命働く彼女たちの姿を見て、日本の若い人たちが逆にやろうとってくれることを期待する。

講演後、「学校と施設中心の留学生に普通の人々の暮らしの中で介護力を身に付けてほしい」の要望もでるなど活発に質疑が交わされた。

(中川 慶子 記)

第89回
研修会
報告

施設見学会

株式会社 銭形企画 デイサービス和（なごみ）

- 日 時：4月17日 13:30～15:00
- 場 所：下京区黒門通五条下ル柿本町
- 参加者：16名



銭形企画、介護事業所ですがとてもユニークな名前です。命名の由来は、江戸の町の目明かし「銭形平次」から取ったとのこと。銭形平次はある年代以上の人には親しみを持って思い出せる庶民のヒーローです。

まず、銭形企画の訪問介護事業所管理者の高橋弘江さん（当会の会員です）から、小さな宅老所から始めて今、23年目を迎えたという会社の概要をお聞きしました。現在では、介護保険事業としてデイサービス和、訪問介護事業所、居宅介護支援事業所。障害者支援事業として、デイサービス和、Let'sゼニガタ、ケアマネジメント事務所、放課後等デイサービスこまちと事業を展開しています。

その後介護事業所の真向かいにあるデイサービス和を見学しました。1階が高齢者の通所介護、2階は障害者の生活介護のスペースになっています。1階では、定員20名とのことですがほぼ満員、カラオケに興じる方たち、トランプをするグループ、賑やかな時間を過ごされていました。2階も賑やかでした。バットでホームランというゲームに歓声が起こり、隣のグループは輪投げをしていました。昼食後のレクリエーションの時間は、利用者の希望で1階に行ったり、2階に行ったりとごく自然に利用者間の交流が来ています。

見学後、銭形企画の創設者で会長の上野初子さんに、23年前に宅老所を始めきっかけから、今に至るまでのお話を伺いました。

壬生の商店街で家を貸してくれる人がいたので始めた。ヘルパーをしていたがいろいろな縛りがあり、思うような仕事ができなかった。縛りのない楽しいことがしたかった。介護の工夫をしながら、みんなで旅行に行ったときは大感激だった。旅行は今でも銭形企画の大切な行事として続いており、高齢者も障害者も一緒に行っている。

最初は精いっぱい働いても自分の給料までは回らなかったけれど、職員を育てて何とかここまでくることができ、障害者支援にも取り組み事業が広がった。この場所に移って地に足がついた感じがする。制度がいろいろ変わるけれど、利用者のしてほしいことをしてあげたい、満足させてあげたいと思っている。夏祭りや月一回の和み喫茶で地域との交流を持っているが、これからやりたいことは、一人ぼっちの人が出てこられるような居場所を作りたい。お茶飲んでおしゃべりすることは大事、しゃべったら元気になる。地域に根差した活動を展開させていきたい、まだまだ終わりではないと、前向きな力強い発言に、私たちも元気をもらいました。お話をくださった上野さんの右側には透析の機械が置かれ在宅透析をしながらのお話でした。

見学の最後は、少し離れたところにある障害児の放課後デイに行きました。外からの見学でしたが、必要な人に必要な支援を届ける志に感銘を受けました。

（竹山 幸江 記）

100号 特別寄稿

会報が今号で100号になりました。100号を記念して、日頃お世話になっております研修会講師の方、よりよい介護をつくる市民ネットワークの方、事業所の方、また、発足当時の会員、発足後少し経ってから入られた会員、昨年会員になられた新入会員の方々から、いろいろな思いを寄せていただきました。



「ドクターでは、介護はできない」といわれたデンマークでの研修

奈倉 道隆（介護福祉士・老年科医師）

20年前、デンマークに短期留学した私は、現地の介護を体験しようと、ヘルパーステーションを訪ねて、訪問に同行したいと希望した。所長は、「日本で介護の研修を受けてきたか」と尋ねた。私は、「老年科の医師だから、介護の研修は受けてないがケアはできる」と答えた。所長は、「ドクターか、ドクターでは介護はできない。私たちは、医療ではなく、介護の訓練を3年間している。勝手な行動をしないと約束するなら、同行してもよいが・・・と赦してくれ、医療とは全く違う「介護福祉」が体験できた。

当時のデンマークは、特養を廃止して在宅介護に切り替えており、保護的でなく、本人の現存能力を活かして自律的生活ができるよう社会環境の整備に力を入れる介護であった。社会環境とは人間が作り出す環境である。社会制度を活用し、住まい・介護機器・介護福祉士やリハビリ職などの人・生きる意欲が高まる音楽療法などを、利用者の必要に応じて組み立てるもの。生活の安全・安楽をめざす医療とは全く異なる。今の日本の保護的な介護は、自律的生活の支援ではなく、医療の補助に飲み込まれていくケアのように思えてならない。



祝 100号・社会活動・誓協働

野地 芳雄（京家連 会長）

継続は力と申しますが、NPO 法人きょうと介護保険にかかわる会の会報が、はや100号迎えられ心から敬意を表します。

介護を受ける高齢者の立場に立って、課題や問題点を深める会員研修や介護保険のあり方についてタイムリーな指摘は大変参考にさせていただいてきました。このような会の皆様の活動にも関わらず、障害者福祉サービスと介護保険サービスが統合されつつあります。いわゆる共生型サービス事業所の新設です。伝え聞くとところによると、B型事業所で働いている65才以上の障害者が介護保険適用となることの事です。

大切なことは、この制度改正が、障害者や高齢者にどんなメリット、デメリットがあるのかが押さえどころです。「全世代型社会保障」という言葉にどんな課題や問題が潜んでいるのか？同じ事業所で働く障害者の負担に格差が生まれないのか？貴会の会報でご教示いただければ幸甚です。障害者や、高齢者に不利益が生じないよう共にならばと存じます。（京家連＝京都精神保健福祉推進家族連合会）



会報100号発刊に寄せて

荒井 祐子（有限会社スマイルケア 会長）

会報100号発刊、おめでとうございます。19年の長きに渡り、編集・発刊に携わって来られた関係者各位のご努力によるものであり心から敬意と感謝の意を表します。

私は、福祉用具の事業者として貴会とかかわりを持たせて頂いております。会報は、毎回興味深く読ませていただき特に研修会の報告では、講師の方の講演内容の要点をうまくまとめてあるのには、感心しております。研修会に参加出来なくても、会報を読めば情報が得られるので助かっております。

第72回研修会「どうなる？福祉用具・住宅改修」では、講師を務めさせていただきました。軽度者福祉用具レンタルが、原則自己負担化という財務省主導の改正案が浮上し、福祉用具レンタルの重要性を皆様に解説出来る機会を頂きました事感謝申し上げます。第75回研修会「福祉用具の会社見学と体験利用」では、弊社に皆さんで来社していただき実際に福祉用具を見て・さわって理解を深めていただきました。

また、第三者評価では弊社のサービスを3年に一度調査をしていただいております。いつも、専門性の高い調査員が来てくださり、すぐれた人材がたくさんいらっしゃる事に驚くとともに、弊社に寄り添いながらアドバイスをくださる信頼できる評価機関であると確信しております。

今後も、貴会には介護保険制度を市民目線で見つめ継続的な研修会開催や、第三者評価の評価機関としての取り組み、介護保険のあるべき姿を追求する市民団体として活動をしていただき、世界に類を見ないすばらしい介護保険制度がいつまでも継続しますように祈念いたします。



企業の課題、市民の課題

小國 英夫（マイケアプラン研究会 代表）

5月21日、厚生労働省は2040年度の社会保障給付費（年金、医療、介護、保育、生活保護等の給付費総額～自己負担分を除く）は190兆円になると発表した。中でも介護費の伸び率が最も高く2018年度に比較して2.4倍になる。また、2040年度には団塊ジュニア世代（1971～74年生まれ）が全員65歳以上となり、高齢者人口は約4000万人に達し介護職員不足がさらに深刻になる。政府に任せれば「介護予防の強化、給付の抑制、保険料や自己負担のアップ、高齢介護労働者の採用、そして事業者への締め付け」がひどくなるだけ。

しかし、要介護者の背景には社会的要因も少なくない。単身世帯や老夫婦世帯、低所得世帯、社会的孤立世帯等々が急速に拡大している。この点にもっと注目すべきである。例えば職住近接を進めるとか、家族関係だけでなく近隣関係を改善するとかが重要な課題となる。これらは行政課題でもあるが、基本的に企業の課題であり市民的課題である。我々はこれらにもっと注目し、早急にアクションを起こす必要があると思う。



介護保険制度充実への一層の発信を

西村 一三（会員）

本会の会報が創刊以来100号の記念すべき節目を迎え、今日まで梶理事長始め発行に携わられた関係者のご尽力に心から敬意を表します。巻頭の時宜を得た的確な提言、毎月の研修会の見事な取りまとめなど充実した内容と最近は部数等も増加し、同慶の至りです。

小生の本会への入会は、すべての勤務を終えた翌年の平成18年で、介護保険制度の発足後「介護サービス情報の公表制度」の調査員の養成研修からです。そのころ、会報は30号を超えていたと思います。2006年秋から平成21年まで会員諸氏とともに京都府の丹後から南部の宇治地方に至る介護施設等の訪問調査に参加し、第三者調査評価も含めて、介護施設の現場から多くのことを学びました。平成24年からは、家内が介護保険の利用者になり、スムーズに老老介護に移行でき、本会の研修会等への参加が制約され、隔月に届けられる会報は会の活動ぶりがよくわかり、精読しています。介護保険制度が年々厳しく制約されていく状況下で、会報が「制度の安定的発展と高齢者福祉の増進」に向けて、今後とも発信源として寄与されることを願っています。



かかわる会の機関誌が100号ですか！！

中嶋 康喜（会員）

梶理事長も長い間、頑張っておられたものですね！

もちろん「いろいろな人の支えや協力があったることだ」とおっしゃることでしょうが、ご本人も大したスタミナです。

創立メンバーのうち残っておられる方で良く存じ上げているのは、梶夫妻で、大半はお辞めになり（亡くなられた方もあり）、お目にかかる機会もありません。

私が入会したのは、「障がい者福祉の三評がやりたい」ということでした。すでに「高齢者福祉三評」の試行事業は実施済みで、会員のうち何人かの方は「評価者資格」を取得済みでしたが、初回の「養成講座」を受講して「評価員」になった私も、三評では古株の一人だといえます。

「障がい者三評」は未実施だったため、いささかおこがましいことと思いつつ、十分な知識もないまま高齢者施設の評価をすることになりました。

しかし、この会はよく勉強する会ですね。特に、中川副理事長が加入されてからは、研修会が質量ともに一層充実したのじゃないでしょうか。

今は、「学習と評価」から「運動」も展開されていますね。

この会の成長と活動の充実によって、「京都の福祉」が、いつまでも市民生活の心強い味方であるようにと望んでいます。



ふたつとない医療、介護サービスの輪

天野 博（会員）

母は満95歳、要介護5、様々な医療、介護サービスを受け、自宅介護を続けています。この7年の奮闘体験をお話させていただきます。

父の四十九日を過ぎた頃から、気丈な母に変化、みなさまも気をつけてあげて下さい。父をさがしに毎夜、徘徊をはじめたとき、いずれ警察や救急のお世話にならざるをえないのかと、呆然自失。

当初は、かかりつけの内科医の処方箋で安定剤を服用。副作用があり、精神科医も訪ねましたが「お母さんは精神科の仕事ではありません」。内科医に思い切って「高齢者専門の医者を教えてほしい」一瞬表情が変わりましたが「よくわからないまま試行錯誤でした」。

現在の主治医は近所、神経内科が専門、良医にはネットワークがあるのですね。この医者が語った名言「認知症は直りません」「いちばんのケアは愛情です」。

さて、社協の活動をしている親友が「介護サービスを使わないとむりですよ」。はじめて、介護を他人に頼む智慧が。最初のケアマネジャーは優秀、彼女は日記を書くようすすめ、訪問時にかならず目を通しました。彼女のような方はいませんね。介護用品のアドバイスも的確、例えば防水シート、寝具の洗濯問題を解決。また、友人との介護経験の交換から、パットをパンツと組み合わせて使用、本人も気持ちよいし、経済的です。

昨年、誤嚥性肺炎で2ヶ月半、入院しました。この病院には地域連携室があり、看護師が医療と介護を調整。担当の主治医が、ほとんど反応がなくなった母について「延命治療しかできません」母の死が頭に浮かんできて衝撃。この看護師が胃ろうをすすめました。終末医療のイメージがありましたが、決断。胃ろうにより、入院前よりも栄養状態が好転、血行もよく肌もつやつやしてきました。これは大成功でした。

介護は一度きりしかない、人生ですね、介護経験が人を育てます。

第 90 回
研 修 会
案 内

今考えたい

人生100年時代を生きるということ

一心から慶べる長寿社会を

日 時 6月22日(金) 13:30~16:30

場 所 ひと・まち交流館京都 3階 第5会議室

講 師 中西 豊子氏 高齢社会をよくする女性の会・京都 前代表
よりよい介護をつくる市民ネットワーク・呼びかけ人

参加費 会員 300円 一般 500円

「人生100年時代」と言われるようになりました。実際平均寿命は、日本だけでなく世界中で、どんどん延びています。平和と豊かさが人間の寿命を延ばすと言いますが、地球上には残念ながら戦火や飢饉の迫る地域もまだあります。

しかし、多くの地域で寿命が延びています。その先端を走っているのが日本です。日本は予想を超えるスピードで超高齢社会が到来しましたので、もともと脆弱だった社会福祉政策が追いつかない状況に。試行錯誤の政策に我々国民も振り回されてきた様に思います。

高齢者運動を始めて30年、混沌の社会を振り返り、またこれから先の心から喜べる長寿社会を目指して皆さんとご一緒に考えたいと思います。

第 91 回
研 修 会
案 内

日 時 7月21日(土) 13:30~16:30

会 場 ひと・まち交流館京都 3階第5会議室

内 容 現在交渉中



会員のひろば

津田洋子さん ♥

あの3月11日からもう7年経ちました。ときどき、東京を経てつくばや勝田に通っています。夜の東京は不夜城です。東京タワーはドラえもん誕生日にはドラえもんカラーに、浅草のスカイツリーは、隅田川を溯ってバスでつくばに向かうと、何と美しい、藍色や茜色を基調としたグラデーションに染まります。奇麗だな、と見る反面、あの時は日本中どこもかしこも、真っ暗だったけど、皆、別に文句も言わずに受け容れていた。アテネを空から見ると、どこに都市があるのか分からないほど暗い。パリだって基調カラーの白色燈がポツリポツリと点いているばかり。ドイツは、フランスから原子力エネルギーを買って、豊かな生活を送っているようですが…。日本の現状は「人の噂も75日」と、何のてらいもなく、もういいだろう、忘れたらろうと電力を使い倒しています。今般の予算委員会の証人喚問を見る限り、「選挙は75日より先だ…」という声が一方の席から聞こえてきます。我が事じゃないと距離を置いていると、足をすくわれる、と危機感がつのります。(2018年3月28日)

編集後記

会報100号を発行するにあたり、ご多忙中のところ寄稿を快くお引き受けいただきましたこと、感謝申し上げます。ありがとうございました。これを励みに、一歩また一歩とあゆみを進めてまいります。
(広報委員一同)